

平成 29 (2017) 年度 研究倫理委員会 自己点検評価

1) 年度当初の目標<P>

今年度も「松本大学研究倫理委員会規程」に則り、研究の倫理および不正行為に係わる基本的事項に関する事、研究者から申請のあった研究の実施計画の審査に関する事、研究に係わる個人情報保護に関する事、その他研究の倫理に関する事を審議することを目標とする。

2) 目標の実施状況<D>

本年度、研究倫理委員会の委員構成を以下に記した。事務局からは総務課長を含めて2名が参加した。

学長が指名する大学院及び各学部から選出された教員

山田 一哉、尻無浜 博幸、矢崎 久、河野 史倫、澤柿 教淳、飯塚 徹
研究に関する倫理的及び法的事項を総合的に判断するにふさわしい識見を有する者

増尾 均、福島 智子

一般の立場を代表する学外者

瀬川 格淳 (専称寺住職)

a) 研究計画審査

2017 年度に当委員会へ研究倫理審査申請のあった案件は以下のとおりであった。

【第 16-03 号】

研究者名：人間健康学部 矢内 和博専任講師

研究計画名：視機能に対するドナリエラ・バーダウィルカプセル摂取の影響

研究の意義・目的：近年パソコンやスマートホンなどの液晶画面を長時間見ることが増え、視力の低下や目の疲れなどを感じる事が多いと言われている。特にブルーライトなどは、眼の酸化ストレスとなることから視機能の低下が考えられている。微細藻類ドナリエラに含まれるβ-カロテンは、抗酸化食品として知られ、健常者にドナリエラ・バーダウィルカプセルまたはプラセボカプセル(カラメル色素(I):セルロースを1:1)を経口摂取させ、視機能に対する影響を調査する。

研究対象者：60名

研究期間：平成29年4月1日から平成29年8月31日まで

申請者の矢内和博専任講師から、平成 29 年 10 月 6 日に下記の変更点が申請された。メール審議の結果、平成 29 年 10 月 13 日付けで承認した。

■変更点：

研究者の追加 江原教授

研究機関の延長 平成 29 年 8 月 31 日まで→平成 30 年 3 月 31 日まで

【第 17-01 号】

研究者名：人間健康学部健康栄養学科 専任講師 長谷川尋之

研究計画名：身体活動量は首尾一貫感覚と関連する

研究の意義・目的：

健康の保持・増進ならびに QOL の向上を目的とした栄養教育プログラムの開発を主たる目的とする。

健康保持能力を表す首尾一貫感覚（以下、SOC）を用い、対象者の健康行動（主として食事調査、身体活動量）との関連を明らかにすることで、栄養教育プログラムの立案に際し、アセスメント項目として利用可能になると考えられる。SOC を利用した個々に対応した栄養教育プログラム作成に繋がると考えられる。

研究対象者：50 名

研究期間：承認日より平成 30 年 3 月 31 日まで

【第 17-02 号】

研究者名：人間健康学部健康栄養学科 専任講師 長谷川尋之

研究計画名：ジュニア競技者を対象に適切な成長と体力向上を目的とする栄養教育プログラムの開発

研究の意義・目的：

成長期の競技者が適切な成長と競技力向上を意識できる栄養・食事の自己管理の習得を目的としたスポーツ栄養プログラムの開発を主の目的とする。

成長期の競技者では、勝利至上主義による過度なトレーニングにより適切な成長を妨げている可能性がある。一方で競技力向上を目指す上でトレーニングは欠かすことの出来ない要素であり、トレーニング量を確保できる体力向上や怪我の予防が現場では望まれている。

そこで、本研究では高校生を対象として適切な成長を意識するための「食育」と体力向上や怪我の予防を目的とした「スポーツ栄養サポート」を両立させた成長期競技者向けの栄養教育プログラムを立案、実施し、その効果を検討する。

近年、競技者の栄養サポートの認知や必要性、需要は高まりつつあるが、多くの現場では栄養サポートの内容がわからない、こういった方に依頼をすればいいかわからないと言った声がきかれる。栄養教育プログラムの作成は認知度の向上とともに、現場栄養士の指針としてスポーツ現場の創出に繋がると考えられる。

研究対象者：50名

研究期間：承認日より平成31年3月31日まで

【第17-03号】

研究者名：人間健康学部スポーツ健康学科 教職センター 教授

小松茂美

研究計画名：保健分野の学習の成果（意識調査）から保健体育科教員の授業実践について考える

研究の意義・目的：

小学校・中学校・高等学校で受けてきた保健分野の学習に関する意識調査から保健分野の学習への取り組みの意識や成果を分析し、保健体育科教員の授業実践のあり方を考え、本学の教員養成（主に保健体育科教員）の一助とする。

研究対象者：100名

研究期間：承認日より平成30年1月31日まで

【第17-04号】

研究者名：人間健康学部健康栄養学科 専任講師 長谷川尋之

研究計画名：競技現場における鹿肉利用の有効性に関する検討

研究の意義・目的：

シカの抽出成分を飼料として与えた動物実験では持久能力の向上が報告された。シカ肉には脂肪燃焼の働きを助けるカルニチンが多く含まれており、持久能力向上に寄与したことが推察される。しかし、これまでヒトを対象とした研究はなく、食事や食品中に含まれる摂取量で同様の効果が得られるかどうかは明らかではない。

本研究はシカ肉の運動能力向上の機能性が、実際のスポーツ現場で活用することができるかどうかを明らかにすることを目的とする。

近年、シカによる自然環境の破壊や農業への悪影響が報告されており、毎年一定数の捕獲・屠殺が行われている。屠殺されたシカの一部は、加工処理されシカ肉として出荷されることがあるが、現在までに有効性を広く知られてはい

ない。シカ肉は高たんぱく質、低脂質の良質のタンパク源であることは明らかにされており、本研究の結果と併せて今後、スポーツ現場等での活用が期待され、環境問題及び競技者の栄養改善に繋がる。

研究対象者：10名

研究期間：承認日より平成30年3月31日まで

【第17-05号】

研究者名：人間健康学部健康栄養学科 専任講師 藤岡由美子

研究計画名：学生と災害時要配慮者の備蓄調査と備蓄支援

研究の意義・目的：

災害時要配慮者とは、高齢者や特定疾患患者など避難生活に特別な配慮を要する人をいう。行政が災害時に備えて確保する病態用食品は全体の1%未満に過ぎず、災害時要配慮者は自分で備蓄しなければならないが、そのような指導は全国の16.9%の自治体でしか成されていない。本研究では災害時要配慮者の自助を支援するために備蓄調査と備蓄の方策を提案する。学生には災害時の管理栄養士の役割を理解させ、備蓄調査を通して自助の意識啓発を行う。

研究対象者：

- ① 松本大学：300名、鈴鹿医療科学大学：150名
- ② 昭和伊南総合病院：30名、みえID（炎症性腸疾患）患者会：30名

研究期間：承認日より平成32年11月30日まで

【第17-06号】

研究者名：人間健康学部健康栄養学科 専任講師 藤岡由美子

研究計画名：介護食の開発と喫食調査

研究の意義・目的：

長野県の平均寿命は男女共1位だが、健康寿命は男性18位、女性16位であることから健康寿命の延伸が課題となっている。咀嚼能力が高く栄養状態が良好だと健康寿命が長く、介護食の市場は拡大の一途を辿るが、高齢者に慣れ親しんだ郷土料理を利用した介護食は市販されていない。

我々は高齢者の咀嚼機能や食欲低下に伴う低栄養を防ぐために、長野県「味の文化財」に指定されたおやきの介護食を開発した。今年「創作おやきコンテスト」で優秀賞を獲得したおやきを継続的に対象者に提供し、喫食率、食事QOL、栄養状態や咀嚼機能が維持されたかどうか経過観察する。

研究対象者：

① 相澤病院サービス付高齢者向け住宅「結」本庄 利用者 25 名

② 特別養護老人ホーム 真寿園 利用者 25 名

研究期間：平成 30 年 4 月 1 日より平成 31 年 3 月 31 日まで

【第 17-07 号】

研究者名：人間健康学部健康栄養学科 専任講師 藤岡由美子

研究計画名：管理栄養士養成過程におけるモデルコアカリキュラムの到達目標を用いた臨地実習の事前事後評価

研究の意義・目的：

「管理栄養士養成課程におけるモデルコアカリキュラム」には、管理栄養士が活躍する何れの職場においても必要な各教科の教育内容（コア）と到達目標が列記されている。臨地実習では、学生が約 50 病院に分れて教育を行うことから、実習内容や評価方法をできる限り標準化して行うことが必須である。我々は、臨地実習における到達目標を達成するために、事前事後学習、実習課題、評価基準等を設定し教育を実践してきた。本研究ではその到達度を評価する。管理栄養士養成教育におけるモデルコアカリキュラムを利用した授業評価は、本邦初の報告となる。

研究対象者：人間健康学部健康栄養学科新 4 年生 約 80 名

研究期間：平成 30 年 2 月 1 日より平成 31 年 1 月 31 日まで

【第 17-08 号】

研究者名：教育学部学校教育学科 准教授 和田順一

研究計画名：Paraphrasing 技法の習得が Speaking 能力に及ぼす影響

研究の意義・目的：

文部科学省が次期学習指導要領において Speaking の能力を発表とやり取りという項目に CEFR の指標に基づいて分類がなされた。Output に関しては文部科学省答申（2016,p.193）にあるように、「書くこと」や「話すこと」に課題があるという現状がある。そのため Communication Strategies が実際にどのように影響をするかを検討し、学生の Speaking 能力の向上を調査する。

研究対象者：16 名

研究期間：承認日より平成 30 年 2 月 5 日まで

【第 17-09 号】

研究者名：教育学部学校教育学科 准教授 國府田祐子

研究計画名：論理的文章の書き方指導と学生の文章記述力の変化

研究の意義・目的：

文部科学省は2020年度から「大学入学共通テスト」の実施において、記述式問題を導入すると発表した。この背景には、高等学校国語科において「文章の内容や表現の仕方を評価し目的の応じて適切に活用する」ことや「自分の考えを根拠に基づいて的確に表現する」ことに課題があるという指摘がある。(答申,2016,p.124)

大学入学後早い時期に論理的学習の書き方指導を行い、その指導内容および方法を検証し、学生の文章記述能力の向上を図る。

研究対象者：61名

研究期間：平成29年4月10日より平成30年2月20日まで

【第17-10号】

研究者名：教育学部学校教育学科 教授 小林敏枝

研究計画名：発達障がい児のバランス能力に関する研究

(下肢アライメント・土踏まず形成・足趾圧等とバランス能力の関係について)

研究の意義・目的：

近年、遊びの変化や生活環境の影響などにより、日本の子どもたちの体力低下が懸念されている。障害のある・なしに関わらず幼児期は運動発達において重要な時期であり、この時期の基本運動の獲得が学齢期にも影響することはいうまでもない。

特に障害のある子どもたちの中には運動面の困難さがあり、幼児期に獲得されるはずの運動技能が未獲得であることや、基本運動の獲得が学齢期になっても未熟であるとの報告もある。運動面の困難さは見過ごされがちであり、運動発達への支援が遅れることもある。このような背景を踏まえて、障害のある子どもたちの運動能力の実態を明らかにすること。さらに、姿勢や歩行能力に関係の深い「足裏測定」「下肢アライメント測定」を実施し、土踏まずの形成・足趾圧の分析、動きのぎこちなさ、運動の姿勢のアンバランスなどの実態を把握することを目的とする。さらに今回は、健常児の測定を行い、障がい児の実態との比較を行い、運動発達支援へのアプローチについて検討することを目的とする。

研究の意義については

発達障害児の数は増加しており、特別支援教育に在籍する知的障害を含む発

達障害児は、視聴覚障害や肢体不自由の約 4 倍いると報告され、様々な医療的介入が実施されている。医療的介入では、コミュニケーション、学習障害に焦点が当てられることが多いが、運動障害に着目した研究は少ない。今回はその実態を明らかにし、日常の保育・教育への介入を示唆する。以上のことから、障がい児の運動発達支援に貢献できる研究として意義がある。

研究対象者：障がい児 30 名、健常児 50 名

研究期間：承認日より平成 32 年 3 月 31 日まで

【第 17-11 号（第 17-06 号の再提出）】

研究者名：人間健康学部健康栄養学科 専任講師 藤岡由美子

研究計画名：介護食の開発と喫食調査

研究の意義・目的：

長野県の平均寿命は男女共 1 位だが、健康寿命は男性 18 位、女性 16 位であることから健康寿命の延伸が課題となっている。咀嚼能力が高く栄養状態が良好だと健康寿命が長く、介護食の市場は拡大の一途を辿るが、高齢者に慣れ親しんだ郷土料理を利用した介護食は市販されていない。

我々は高齢者の咀嚼機能や食欲低下に伴う低栄養を防ぐために、長野県「味の文化財」に指定されたおやきの介護食を開発した。今年「創作おやきコンテスト」で優秀賞を獲得したおやきを対象者に提供し、喫食調査と嗜好調査を無記名のアンケートで行う。

研究対象者：

③ 相澤病院サービス付高齢者向け住宅「結」本庄 利用者 25 名

④ 特別養護老人ホーム 真寿園 利用者 25 名

研究期間：平成 30 年 4 月 1 日より平成 31 年 3 月 31 日まで

受理番号 第 17-12 号

研究者名：人間健康学部スポーツ健康学科 准教授 山本薫

研究計画名：持久的およびレジスタンストレーニングが一般高齢者とマスターズアスリートの動脈スティフネスに及ぼす影響

研究の意義・目的：

日本人の死因の第 1 位はがんであるが、同 2 位の心疾患と同 3 位の脳血管疾患患者の合計死亡者数はほぼがんと並ぶ。これらの疾患は動脈硬化影響が大きい。2000 年頃から運動の動脈硬化改善に関する研究報告が数多く出始め、ランニングやウォーキングなどの有酸素運動継続が、有酸素運動を実施していな

い同世代の男性の集団と比較して、超音波で測定した頸動脈の柔らかさを示す数値が高く、血管が柔らかいことが示された。一方、異なる運動のタイプに抵抗を利用したレジスタンス運動(RE)がある。加齢と共に筋力低下や筋萎縮が引き起こされることは数多くの報告があり、要介護状態にさせずに健康寿命を延伸するためにも筋量増加に対して効果が認められている。しかし、動脈硬化に影響する血管の柔らかさに関しては低下させるか変化しないとの報告があるが十分な検討がなされていない。また、日本国内でマスターズ大会に出場する人々は日ごろからトレーニングを積んでいると思われるが、持久系トレーニングを主に積んでいる者とレジスタンストレーニングを主に積んでいる者について、高齢者で長年のトレーニング結果として現れる動脈スティフネスについての報告は少なく明確ではない。先行研究にて調べた介入結果と比較するとともにマスターズアスリートにおいては専門種目間（持久力系と筋力系）にて比較し、合わせて検討を加える。

目的：本研究は、前期高齢者男女を対象に、筋力と動脈スティフネス（血管の硬さ）の改善に影響を及ぼす筋力系および持久力系トレーニングの影響を明らかにすることを目的とする。

研究対象者：20名

研究期間：承認日より平成32年3月31日まで

b) 研究倫理教育について

・研究倫理教育の一環として、FDS委員会および研究推進委員会と下記講習会を共催した。

8月4日（金）16:50-18:20

「科研費を必ず獲得できる申請書の作成方法：どのような点に気をつければよいのか？」

講師：久留米大学分子生命科学研究所長 児島 将康 教授

c) 大学院生向けの研究倫理教育について

昨年度に引き続き、大学院生の必修科目である「健康科学特論」の第1回目に研究倫理に関する内容を導入した。また、日本学術振興会編集のe-learningシステムを受講させた。

d) その他

・研究倫理委員会にて審議する必要がある研究か否かについて研究者個人が判断できる指標として、「倫理審査が必要ない研究」及び「人を対象とする研究

に関する倫理委員会の審査を要する研究かどうかを判断するためのチェックシート」を全教員に配信した。

・申請書等の関係書類を現在の Ridoc の人間健康学部のフォルダから、全学部の教員がアクセスできる研究倫理委員会のフォルダに移動した。

3) 点検・評価の結果（目標の達成状況）<C>

a) 研究計画審査について

審議の際、すべての研究計画について規程・ガイドラインに照らした問題点の指摘とその解決策の例示を行った。委員長から、各申請者にそれらの点について修正を要求した。修正の確認に関しては委員会で委員長に一任した。委員長は、関係委員と申請書の適切な修正がなされたことを確認したあと、承認したというメールを全委員に配信した。また、修正審査の結果を申請者と最終責任者である学長に文書で伝達した。

b) 教員・大学院生に対する研究倫理教育

研究倫理に関する最低限の教育・講演会を導入することができた。今年度から教職員に加えて大学院生・学生も含めて 34 名が参加した。また、大学院生は全員に、e-learning の修了証を提出させた。

4) 次年度に向けて<A>

次年度も研究倫理の厳格なる審査と研究倫理教育を推進していく。研究倫理教育に関しては、日本学術振興会の「科学の健全な発展のために - 誠実な科学者の心得 - 」の e-learning 教育を広めていくことも検討課題である。

<執筆担当/研究倫理委員会 委員長 山田 一哉>